論文の内容の要旨

論文題目　　中世スリランカの王権と仏教
氏　　名　　藪内聡子

本研究は、アヌラーダプラ時代、紀元前 3 世紀の仏教伝来から、15 世紀、コーッテ時代頃までのスリランカの仏教史を、史書、碑文資料等を使用し、王権と三宝を視座に論考したものである。スリランカの正史、*MahAvaMsa* とその続編である *CUlavaMsa* は、仏教聖典語のパーリ語で著作されており、仏教学者による研究が必須である。*MahAvaMsa* はインド仏教史研究にも利用されつつ今日に至るが、殊に *CUlavaMsa* の及んでいる時代のスリランカ史研究は極めて遅れているのが現状である。この遅れているスリランカ史研究において、仏教史に関して以下のテーマを取り出し、時代的変遷を考察した。

まずスリランカの王権が仏教的視点からいかに特徴付けられるかについて、第 1 章「スリランカの仏教王権」で概観したのち、三宝としての仏・法・僧を王権の視点から考察するために、仏として、第 2 章「王権と舎利」、僧として、第 3 章と第 4 章「サンガの分裂と統合」「サンガ組織の変遷」、法として、第 5 章「教育と著作」という構成で各章を論じた。また仏教学者の研究の焦点からははずれがちであるが、スリランカにとっては現代も重要となっている民族問題の歴史的背景について、第 6 章「ダミラ人の流入」も設け、ダミラ人の流入に伴いヒンドゥー教が仏教に及ぼした過程を、第 7 章「仏教とヒンドゥー教の融合」で検討した。

第 1 章「スリランカの仏教王権」で考察したのは、仏教に権力の正統性を依拠するスリランカの王権のあり方である。アヌラーダプラ時代の紀元前 3 世紀、dhamma による統治というインドの王 Asoka の理想を引き継いで確立したスリランカの仏教ではあったが、この理想は、紀元前 2 世紀、ダミラ王 ELAra と戦闘を交わした DuTThagAmaNI により覆される。DuTThagAmaNI は島を統合するための大殺戮をもたらした戦士であったが、この戦闘は、個人的なものではなく、sAsana の確立のためであるとして比丘から免罪される。DuTThagAmaNI の英雄伝は、許される暴力と許されない暴力の区別を可能にする新しい原則を呈示することとなった。ポロンナルワ時代以降、諸王に対して Cakkavattin の称号が付与されたが、これもパーリ経典の理想とは切り離されており、政情安定と sAsana の繁栄を脅かす敵に対しては、武力をもって立ち向かう戦士であることが王としての大前提とされた。アヌラーダプラ時代、紀元後 3 世紀の Vetulla の伝播後、王の聖性と菩薩の理想とが融合し、sAsana の繁栄のために菩薩行を実践する菩薩王の概念が確立することによって、英雄たる戦士と仏教徒としての経典的王権の理想の矛盾は仲裁される。ポロンナルワ時代以降、MahAvihAra 派によりサンガが統一されたのちも、王権の理想として Vetulla の教義は存続した。

第 2 章「王権と舎利」では、王権と舎利の関係、そして舎利の存在意義について論じた。

舎利は仏陀そのものと捉えられ、仏陀の遺身舎利、仏陀成道の菩提樹、仏陀使用の鉢などが、王室により大切に管理されてきた。それはこれらの仏陀ゆかりの聖物に仏陀降臨の奇跡が繰り返し生じてきたからである。舎利を祀る仏塔は、仏の世界と神々の世界と人間の世界の共有の場であり、舎利の保有が全スリランカ掌握という王権の象徴であった。また舎利は疫病や飢饉などの除災、雨乞いの儀礼などにおける本尊でもあった。アヌラーダプラ時代初期には舎利を安置する巨大な塔が建立され、それが王統の権威を承認させる手段でもあったが、ポロンナルワ時代以降、王権の象徴たる舎利は、アヌラーダプラ時代にはAbhayagiri 派が管理していた歯舎利となる。諸王は都に歯舎利堂を建立することで集権化につとめ、遷都に伴い歯舎利堂も移動した。菩提樹が植樹され、巨大な塔が築かれた古代都市アヌラーダプラは、ダンバデニヤ時代以降、首都が南下するに伴ってシーハラの王権からは放棄されることとなる。

第 3 章「サンガの分裂と統合」では、サンガ内の論争のために分裂したサンガに対する王権の行使が、不正な比丘の追放、すなわちサンガの浄化にはじまり、サンガの規律の設定、サンガ統一、さらにはサンガ組織の再構築の指揮にまで及ぶ過程を追った。王は sAsana の最大の支援者であることを、塔や寺院の建立、祭祀、出家者に対する資具の支援といった sAsana の持続の場を設けることによって人々に承認させていたが、次第に sAsana の持続のための秩序を存続させるための条件を案出し、これを監視する者という認識がなされていく。アヌラーダプラ時代初期において MahAvihAra、Abhayagiri、Jetavana に分裂した三派は、ポロンナルワ時代、ParakkamabAhu I のサンガ浄化と統合により MahAvihAra の受戒のみで統一され、スリランカ仏教史上はじめてサンガ最高責任者 MahAsAmi の役職が設定された。ダンバデニヤ時代以降は、さらにサンガ内に araJJavAsin と gAmavAsin の枠組みが設定され、それぞれの長である MahAthera が MahAsAmi に次ぐ役職とされた。またサンガ階層性確立の過程で、王権行使の手段として王の名で KatikAvata が度々発布され、規律遵守が要請された。

第 4 章「サンガ組織の再変遷」では、ダンバデニヤ時代に整備されたサンガ内の組織、1)araJJavAsin と gAmavAsin　2)Ayatana　3)pariveNa　4)gaNa のそれぞれについて、アヌラーダプラ時代に遡り、組織として成立するまでの変遷を辿り、さらにダンバデニヤ時代以降のそれらの組織の変容にもふれた。araJJavAsin と gAmavAsin の緩やかな類別の傾向は、アヌラーダプラ時代初期からすでに生じていたが、アヌラーダプラ時代中期以降、島内の王位継承抗争、インドからの侵略にともない、araJJavAsin が台頭をみせる。ポロンナルワ時代、サンガ浄化と統一の会議の首座をつとめた MahAkassapa は、DimbulAgala 出身の araJJavAsin であった。ダンバデニヤ時代以降は、araJJavAsin と gAmavAsin を区分して組織立てることでサンガの統一と和合が図られた。島内ではアヌラーダプラ時代後期からことに寺院封建制が拡大し、土地や村を所有している比丘たちの生活共同体である Ayatana が進展し、派よりはむしろ Ayatana の単位で寺院管理がなされていく。ポロンナルワ時代とダンバデニヤ時代には島内に主だった 8 の Ayatana が存在し、中央集権化された。pariveNa はア

ヌラーダプラ時代初期には比丘の住む房舎であったが、次第に教育機関に変化する。ダンバデニヤ時代以降は、Ayatana と pariveNa の組織に重なりがみられ、ともに教育の中心的場として存在した。gaNa は布薩をする集団であった。ダンバデニヤ時代以降、MahAsAmi、MahAthera、Ayatana の長、大規模な pariveNa の長は王が任命することになり、王権のサンガ掌握の体制が整った。

第 5 章「教育と著作」では、王室の支援による聖典の普及と比丘の著作活動、比丘の教育段階、王を頂点とする在家の教育内容、聖典以外の著作について整理した。寺院は出家者の住処であると同時に、教育の場であった。dhamma 存続のための聖典伝承は記憶が主体であったが、諸王は書写の支援を積極的に行った。王の教育は比丘が担っていたため、アヌラーダプラ時代後期以降は、比丘のみならず、王自らが仏教関連文献の著作にもあたるようになる。パーリ経典においては世俗的な学問を比丘が追及することは禁止されていたが、時代を経て比丘はあらゆる学問をするのが常となった。王の教育も様々な分野に及び、サンガはポロンナルワ時代において MahAvihAra 派に統一されたにもかかわらず、その後もサンスクリット語文献はスリランカに移入された。そして註釈のような解釈的分析的著作だけではなく、サンスクリット語文献に関する学問も継続してなされ、パーリ語やシンハラ語文献の内容や形式にも影響を及ぼした。

第 6 章「ダミラ人の流入」では、島内にダミラ人が往来し、次第に定住していく過程、ダミラ人をめぐる史書の記述の真偽、そしてダンバデニヤ時代のシーハラ政権の南下について検討した。アヌラーダプラ時代中期頃からダミラ人の定住がみとめられ、その代表的な存在は傭兵の VelakkAra であった。南インドの兵士で捕虜として連行された寺院奴隷、石工などの職人も存在した。史書の記述に反して、事実は、ダミラ人が仏教に常に敵対的態度をとったのではなく、またシーハラ人とダミラ人という完全なる民族的対決があったわけではない。多数のバラモンも来島し、バラモンはシーハラの宮廷にも雇用され、王室の通過儀礼も行っていた。さらにダミラ人の影響は、ポロンナルワ時代以降 *ManusmRti* が王事の模範的著作となったことにもあらわれる。しかしポロンナルワ時代における MAgha の侵略以降、シーハラ王による全島統一は永久に不可能となり、ダミラ人の自治領が成立した。

第 7 章「仏教とヒンドゥー教の融合」では、シーハラの諸王のヒンドゥー教の保護、神々の崇拝のシーハラ人への浸透、そして王が神になぞらえられる過程を描いた。インドからの侵略とその支配のもとにダミラ人が流入し、それと相俟ってヒンドゥー教の信仰や儀礼が島内に普及した。ダンバデニヤ時代になると、仏陀が天神中の天神と喩えられ、舎利と神を同時に供養するようになり、さらに菩薩への崇拝が神への崇拝へと変容する。そして Vetulla の普及に伴って王が菩薩に喩えられたように、王室の資質が神の資質と対照されて語られるようになった。